シリーズ―第12回― この本をあなたにも薦めたい

『はやぶさ』　吉田　武 著

探査機「はやぶさ」に関する出版物が多数あるなかで、これをまず推奨するのは「JAXA宇宙研」の歴史を知ることができるからである。それは戦時中、戦闘機「隼」の設計の中核をなし、その後「日本宇宙開発の父」となった糸川英夫の物語でもある。

戦後、アメリカによって航空機の研究は禁止され、東京帝大航空機体工学科の助教授であった糸川は仕事も生きがいも失くす。紆余曲折後、糸川は宇宙に対するアメリカの挑戦を知り、後発の日本でもロケットなら勝算ありと科学・技術による「祖国再建」を決意。資金不足のなかで日本油脂科学から火薬の提供を受けたことにより、固体燃料によるペンシルロケット開発が始まった。世界の主流は液体燃料での開発であったが、糸川には選択肢はなく、世界の常識を破る独創的技術を開発することになる。しかし、アメリカの圧力によって科学技術庁はNASAの技術導入（液体燃料技術）を図り、同時にNASAは朝日新聞の記者をNASAに招待し、骨抜きにされた記者は「科学朝日」を舞台に反糸川宇宙研キャンペーンを繰り広げ、糸川は再び全てを奪われ失意のうちに宇宙研を去る。

生前の糸川英夫の印象は奇矯の人であった。否、それは本来の創造・表現の場を奪われた者の、残された表現の発露が奇矯に見えたのであった。その現象・印象に振り回され、真実に目を向けなかった者の後悔と反省の念をこめて、日本の科学技術水準とその歴史に敬意を表しこの書を薦めます。

公益財団法人 伊藤青少年育成奨学会
常務理事 田代 久美子

『はやぶさ』
著　者：吉田 武
出版社：幻冬舎

スポーツ振興支援

最近いただいた部活からのお便りです。

県立岐阜商業高等学校　テニス部　顧問　安藤喜章

この度は、伊藤青少年育成奨学金スポーツ振興支援金をいただき、誠にありがとうございました。

岐阜県立岐阜商業高等学校テニス部は、全国高校総体への出場回数日本一を誇る本校部活動の中でも特に歴史と伝統ある部活の一つです。今年度は男子21名、女子15名で活動し、全国高校総体、全国選抜大会でのベスト8を目標に掲げ、日々練習に取り組んできました。全国高校総体には3年連続で男女アベック出場することができ、県総体においても団体に加え、男女シングルス、男女ダブルスでも優勝することができました。また、11月に行われた全国選抜大会の東海予選では男女ともにベスト4に入賞し、3月に行われる全国選抜大会の出場権を得ることができました。このような成果を残すことができたのは、選手の努力はもちろんですが、貴奨学会のスポーツ支援金をいただけたことが大きな要因の一つになりました。心より感謝申し上げます。

テニスは非常にお金のかかるスポーツです。特にラケットに張るガットは消耗品で、男子のトップ選手であれば、1日の練習でガットが切れてしまうことも多く、その都度ショップへ張りに出しており、月に2万円程度の出費になります。しかし、部費のほとんどが練習コートの確保、ボール代に使われており、ガットの張り替えは個人負担となっていました。本来なら個人の出費を減らし、その分を強化費として使い、県外への遠征を多くしたいところなのですが、ガット代の個人負担が多いため強豪私学のようには県外への遠征が数多くできませんでした。そこで、貴会のスポーツ振興支援金を使わせていただき、ガット張り機を購入させていただきました。ガット張り機は体育館下の研修室に置き、誰でも朝や放課後など空き時間を利用してガットを張れるようにしました。このおかげで個人負担を減らすことができ、その分昨年までよりも多く県外遠征を行うことができました。このように、本支援金を使わせていただきガット張り機を購入できたことで、その分を強化費に充てることができ、満足できる結果を残すことができたのだと感じています。

今後、私も含め部員達がさらに心がけていかなければならないことは、常に感謝の気持ちを忘れず、謙虚な気持ちで活動に取り組んでいくことです。本支援金を含め、保護者や学校からの活動費は当たり前に支給されるものではなく、こうした多くの方々に支えられているからこそ、夢に向かって思い切り挑戦できるということを日頃の活動を通して指導していきたいと思います。

今後も感謝の気持ちを忘れず、生徒達の夢の実現のため、日々努力を続けていきたいと思います。このたびはこのような支援金をいただき、誠にありがとうございました。今後ともご指導のほどよろしくお願い申し上げます。

岐阜第一高等学校　スキー部　監督　大場順二

この度は本校スキー部に対しまして伊藤奨学金を交付していただき誠に有難うございました。本校スキー部は昭和59年創部以来、全国レベルで活躍できるスキー選手の育成を目指し、海外遠征や県外遠征を積極的に行い、実績を上げてまいりました。

しかしながら、遠征費用の保護者負担はかなりの多額となり、多くの保護者や関係者の熱意に支えられて継続的な強化が実現してきました。

また、スキー競技の特殊性から多くの練習機材が必要であり、機材をそろえる経費の確保に毎年苦慮してまいりました。

このような現状の中で本年度は「スポーツ振興支援金」を給付していただき、ポール・ドリル・レンチ・ワックス・ブラッシュマーカーなど必要な機材をひととおり揃えることができ、練習を例年以上に効率的に実施することができました。

ブラッシュマーカーを使用して基本動作のトレーニングを反復したことにより、動作の正確性が高まり、次の段階としてポールを使用しての実践的なトレーニングを行うことができ、全体のレベルアップを図ることができました。

ワックスについては新しい素材の開発により、性能は飛躍的に向上している一方で価格が非常に高騰しており、この度「スポーツ振興支援金」で購入したワックスは、今後行われるインターハイや国民体育大会で使用する予定であり、一層の成果が期待できると思います。

このような恵まれた状況でトレーニングを実施した結果、1月12日・13日に岐阜県高山市ほおのき平スキー場で行われたインターハイ予選では、本校3年生の水上智之が、回転・大回転の2種目を制覇し、合計4名の生徒が岩手県で行われる全国高等学校スキー大会の出場権を獲得することができました。

また、1月18日・19日に行われた国民体育大会岐阜県選考会では、3名の選手が国体の出場権を獲得いたしました。

さらに、全日本スキー連盟ジュニア強化指定選手に指定されている光井恭平は、1月31日からスイスのクランモンタナで開催される「ジュニア世界選手権」に選考され出場することになりました。光井選手については、今後も2014年ソチオリンピック、2018年オリンピックを目指しさらに高いレベルを目指して強化していきたいと思います。

本県スキー連盟は、平成24年2月に開催が決定している「岐阜清流国体冬季大会スキー競技会」に向けた強化を進めているところですが、清流国体では本校の在校生や卒業生が岐阜県代表の中心選手として活躍することを目標に今後もさらに強化を進めていきたいと考えております。

今回奨学金を支給していただいたことの重みを十分に認識して、周囲に感謝することができる心技体のバランスがとれた選手育成、人物育成を目指して活動してまいります。この度は本当に有難うございました。

奨学会からのお知らせ

財団法人伊藤青少年育成奨学会は、本年4月1日から公益財団法人伊藤青少年育成奨学会となりました。

当財団は、新公益法人制度改革に伴い、岐阜県に対し移行認定の申請をいたしておりましたが、岐阜県公益認定等審議会から認定に適合する旨の答申があり、これを受けて岐阜県知事から公益財団法人としての認定を取得いたしました。当財団の活動に対しまして、今後ともご支援、ご協力賜りますようお願い申し上げます。

公益財団法人 伊藤青少年育成奨学会事務局
〒507-0062 岐阜県多治見市大針町661-1
TEL 0572-20-0800(直)　FAX 0572-29-1168
E-mail: webmaster@ito-zaidan.or.jp
U R L: http://www.ito-zaidan.or.jp/

発　行：公益財団法人 伊藤青少年育成奨学会
印　刷：トーヨー印刷株式会社

伊藤青少年育成奨学会 奨学会だより

ITO YOUTH SCHOLARSHIP FOUNDATION

2011.4.1
vol.12
年2回発行
(4月・10月)

■藤原正彦氏文化講演会を開催しました
■奨学生の声の紹介
■スポーツ振興支援事業に関するお便りの紹介
■公益財団法人への移行認定取得のお知らせ
シリーズ―第12回― この本をあなたにも薦めたい

伊藤青少年育成奨学会主催文化講演会抄録

『国家の品格』の著者　藤原 正彦氏講演

日本のこれから、日本人のこれから

講師　藤原 正彦氏
（数学者・作家・お茶の水女子大学名誉教授）
平成22年12月3日恵那文化センターにて

最近10年間の日本を振り返ってみると改革に継ぐ改革がなされてきた。政治、経済そのほか、とにかく改革、改革。ところが改革しても世の中は全くよくならない。政治はどんどん悪くなる一方、経済も悪くなる一方で、人の心も荒れ果てて社会も荒廃してきた。あらゆる政治家が改革を叫び国民も支持したが改革を繰り返してもうまくいかなかった。とにかく対症療法的な改革を繰り返して深く本質を見る目を失った。今、日本は改革する能力すらなくしてしまった。

例えば、現在民主党がやっている事業仕分けなんてとんでもない。増税もとんでもない。実は減税しなければならない。我々一般の人々がお金に困ってきたら財布をしめなければいけない。しかし、国は全く正反対で、公共投資もする、医療にもどんどんお金を出す。今はそういうことをしないと経済はよくならない。アメリカでも中国でも何十兆円もの公共投資をやっている。

一方、日本は、小泉改革以来ずっと緊縮財政をやってきた。これではお金がまわらずデフレ不況を改善できない。こういう政策を10年以上やってきている。どうして財政出動をしないのか？日本の財政は破綻寸前だと言っている。私は誰が言い始めたか犯人を捜した。アメリカのヘッジファンド、格付機関である。次に言ったのはアメリカの息のかかったIMFとか世界銀行である。日本は財政破綻の心配は全く無い。確かに世界一の国債残高がある。日本の国債の残高が問題になっているが国債の95%は日本人が買っている。諸外国、ユーロ、中でもアイルランド、ギリシャ、スペイン、ポルトガルは今危機にある。アメリカも大赤字である。それらの国は、国債の7割は海外の人が買っているので破綻したら大変なことになる。しかし、日本の場合は対外的な赤字は無い。それどころか日本は大債権国であり300兆円近くを海外へ貸しているのである。公共投資は悪いことだと洗脳されてしまっているが、これではいつまでたってもだめです。

30年前に亡くした父の教えで経済のことは言うなと教えられてきたがここにきて言わざるを得なくなった。これは政治、経済だけでなく日本の国柄が壊されはじめてきたからである。これをストップしないと日本がめちゃくちゃになると思っている。日本の国柄は一体何なのか。日本は数世紀にわたって世界一の初等教育の国であった。初等教育の中心は何か。これは世界中、今も昔も国語である。圧倒的に国語が重要である。初等教育で重要なことは1に国語、2に国語、3，4がなくて5に算数、あとは10以下であると20年前から言い続けてきた。初等教育の目的は自ら本に手をのばす子どもを育てることである。恵那市には素晴らしい図書館があります。伊藤財団が寄付したそうで、先ほど見てきましたが、図書館などを利用して読書することが初等教育の目的なのです。

かつて、日本の国語、算数の力は圧倒的だった。識字率では、日本は江戸の初期に全国平均で50%だった。どこの町にも村にも寺小屋や塾みたいなものを開いて教えていた。400年前、17世紀といえば当時最も進んでいたといわれるイギリスのロンドンでも25～30%であった。ロシアは字の読める人は貴族のみだった。

算数だって日本は数世紀にわたって世界1位だった。1627年に京都に吉田光由（みつよし）という数学者がいた。彼は塵劫記（じんこうき）という本を書いた。塵劫記という本は算数の足し算、引き算、掛け算、割り算を算盤でどうやるか或いはつるかめ算や数字の読み方など。室町、安土桃山時代まで数字の読み方は1，10，100，千、万、億、兆と10倍ずつの読み方であったが万と億の間に10万、100万、千万、億と兆の間に10億、100億、千億、と入れた。将来の経済の拡大を予想していたのである。この塵劫記のお陰で日本は算数王国となった。このように国語、算数の力は数百年にわたって圧倒的だった。ところが3，4年前の国際テストによると日本の子ども達の数学の力が世界で10位、国語は15位になってしまった。日本は子どもの学力が1位でも滅びるしかない気の毒な国なのである。日本は小さな4つの島に人間がひしめいていて80%は山ばかりで資源もない。脳みそ以外に何もないのである。その日本がここ20年ぐらいの改革で10位、15位となってしまった。十数年前までは断トツの1位だったのに。

日本の経営方式も、1980年代は世界で一人勝をしていた。そのとき世界はなんと言っていたか、嫉妬と羨望で“日本はずるい”と。日本にしかできない経営方式をとっていた。基本的には終身雇用と年功序列で家族的な経営をしていた。いったん不況になれば役員の方から賃金カットし最後に労働者へしわ寄せされていた。銀行と融資先の関係も苦しいときに手をさしのべた。大企業と下請けの関係もそうだった。ところが1990年代の初めにバブルがはじけ、あっという間にかなぐり捨てた。しかもアメリカの経営者、エコノミストが日本的経営はもう古いというと、バスに乗り遅れるといって現在破綻している新自由主義をとった。それでめちゃくちゃになってしまった。日本人の和を乱して自由競争がよいと何でも競争の時代になった。それにより社会がすさんできた。日本の国柄を壊されてしまった。もともと日本の経営方式が優れていて全世界に教えていかなければならなかった。何でも競争というのはアングロサクソンだけのものである。

イギリス、アメリカ特にアメリカのやり方を押し付けられて、日本が応じてしまった。こうして日本の国柄が壊されてしまった。

金銭崇拝は日本は世界で最も遠い国だった。幕末から明治維新にかけて来日した欧米人は、日本人の金銭感覚、道徳心の高さはヨーロッパ人よりはるかに高い。勿論日本人の悪口を言った人もいる。商人はだます。約束を守らない。と。しかしすべての欧米人が一致して言っていることは2つしかない。1つは日本は美しいということ。国全体が国立公園のようだ。長崎港の美しさ、段々畑は田園でなく公園であると絶賛していた。この美しい自然ともう1つは、日本人は皆貧しいが幸せそうで、皆礼節を重んじている。貧しいことをなんとも思わない。人々が助け合っていることに衝撃をうけた。江戸時代につくりあげた画期的な社会だった。

ところが今では政治の世界を見ても自らの信念を貫く人がなくなった。20年前まではいつも有利な方につこうという人は風見鶏といわれて馬鹿にされた。今ではそういう人が賢いといわれるようになった。これは政治家ばかりでなく官僚の世界も会社の中でも、学会の中でも有利な方につくようになった。

日本人にも外国人にも我が国は法治国家だと威張る人がいる。私は法治国家は恥ずべき国家だと思う。六法全書は厚ければ厚いほど恥ずべき国。法律などなくも道徳とか倫理により言動を自己規制する、それが高貴な国家である。江戸時代には法律がなくても万引き、犯罪が少なかった。ときどき立看板がでていたが見事に治安は保たれていた。江戸の町には約100万人の人口があった。当時の警察官の数百人といわれる。数百人で100万人をコントロールするということは犯罪が少なかったということである。江戸時代の子どもは万引きはしなかった。どうしてかというと万引きしたら親を泣かしてしまう、お天道様が見ているという美しい発想があった。こういうものを失って法律に触れないことなら、何でもするようになった。

なぜこんなことを言うのかといえば日本は国柄しかないからである。初等教育も道徳も倫理も素晴らしい国だった。これらの国柄を失って日本は普通の国になってはいけない。国柄を直すには教育を直さなければならないが、ここ30年悪くなる一方だ。教育は誰がやっても上手くいかないのである。来年からの小学校の英語必修化は日本をつぶす確実な方法である。国語が圧倒的に重要であり次は算数である。英語ができないと国際競争力を失ってしまうという。これは偽りである。英語と経済、英語と国際人とは何も関係ない。アメリカやイギリスにどれだけ国際人がいるか。英語をしゃべることと国際人は無関係でしゃべれる手段がふえるだけである。教養を身につけるには読書しかない。インターネットをやっても情報は増えるが教養は身につかない。小学生にパソコンを教える必要なし。教育改革ができないのは、文科省が悪いのではなく、悪いのは国民、親である。国民の99%は子ども中心主義を信じている。教育改革は子ども中心主義では絶対できない。子どもを傷つけてはいけないという考え方が間違っている。先生も親も子どもに阿る。子どもの時から躾けなければならないことは寺小屋以来の伝統である。

イギリスも全く同じで社会が広汎に荒れて来ている。治安もここ10年で圧倒的に悪くなっている。子ども達の理数離れ、読書離れ,非行、麻薬などどうしようもないとイギリスの友人が言っていた。とにかくヨーロッパでは、産業革命以来200年間何か困難にぶち当たれば論理的、合理的に考え、理性にのっとって誠心誠意あたれば必ず解決策があると信じてやってきた。しかし、今回の社会の広汎な荒廃は上手くいかない。何かよい知恵はあるかと聞かれたが、日本人が答えをもっていると思う。その答えは日本人のもつ美しい情緒と形。とりわけ日本人の美的感受性である。

西暦500年～1500年までの10世紀の間日本文学には万葉集、古今和歌集、新古今和歌集、方丈記、徒然草、平家物語、枕草子、源氏物語など数多くの文学作品がある。同時代の英文学、仏文学と比べて質、量ともに圧倒している。芸術の部門でも日本の輝けるものとして安藤広重の浮世絵がある。恵那市の広重美術館を先程見てきたがゴッホは広重の浮世絵の独創性に驚いた。直線で描かれた夕立の絵など模写している。広重は、モネ、セザンヌにも大きな影響を与えた。数学でも岐阜県の今の穂積市で生まれた高木貞治という天才がいた。江戸時代の人で世界の数学者のビッグネームである。

日本は文学、芸術、数学、物理の分野が最も世界的に優れている。これは、日本人の美的感受性が圧倒的であるからである。これらの分野で重要なことは知能指数でなく美的感受性なのだ。日本人の美的感受性は花を華道に、字を書道に、お茶を茶道にしてしまう。何でも芸術にしてしまう。この異常な美的感受性のお陰で文学、芸術、数学、物理が生まれた。美的感受性の根本にあるものは何なのか。それは日本の美しい繊細な四季の変化に呼応する自然である。

今TPPとか言って日本の農業を滅ぼそうといている。どんなことをしても農業を潰してはならない。20年間衰退してきたと言うが農業が潰れたら自然が荒れ果てて日本の美的感受性の源泉がなくなってしまう。そして、日本の文学、芸術、数学、理論物理が全部だめになってしまう。そうすれば川下の科学技術がつぶれ、工業立国もできなくなる。日本の政治家に何十回言っても分かってもらえない。

この美的感受性は日本にはほかにもある。もののあわれを慈しむ気持である。虫の音を美しい音楽として聞く。そこに日本人は、秋の寂しさ、はかない人生を投影することができる。ラフカデイオハーンは、このような感受性を持っているのはヨーロッパでは、類まれな詩人だけであるが日本では一般の人がこのような感性を持っていると。もみじ狩りも日本人だけのもの。桜が4、5日で散ってしまうはかなさは青春、人生を投影していると。こんな国民はいない。ほかにも懐かしさがある。海外に住んでいても家族、故郷、自国を懐かしみ愛する気持ちを持ち続ける人が国際人として尊敬される。

そのほか、日本には美しい形というものがある。特に武士道精神からきたものである。武士道精神は、いつか日本人すべてのものとなった。その中心にあるものは何か。忍耐、誠実、勇気であり最も重要なことは惻隠即ち弱者への涙である。この惻隠こそが武士道精神の中核であると新渡戸稲造氏も説いている。いじめは昔からあった。これからもなくならない。昔は陰湿ないじめはなかった。大勢で1人をいじめてはならない。弱者への涙が重要で卑怯なことは憎まなければならない。10歳頃まで、遅くても小学生迄には武士道精神を力ずくで叩き込まなければならない。日本人が昔からもっている美しい情緒、美的感受性、懐かしさ、もののあわれ、家族愛、郷土愛、祖国愛、それから武士道精神から来る弱者への涙、卑怯を憎む心がすばらしい国家社会をつくり、日本の子ども達を救うことになり、人類愛へと進化する。

〈この文章は、90分にわたる藤原正彦氏の講演を短くまとめたものです〉

『国家の品格』
著　者：藤原 正彦
出版社：新潮社

奨学生の声

2010年11月までに提出された学業状況報告の一部です。

堀口 真以　神戸大学国際文化学部4年（岐阜北高校卒）

「文化」―これが私の現在の学業のテーマです。「文化ってそもそも何なのだろう？」「自文化中心主義と文化相対主義のそれぞれの問題点って何？」「多文化共生って、どうやったら実現できるの？」というような、「文化」をめぐる様々な疑問を基にゼミの仲間と話し合ったり、教授の議論を聞いたりしつつ、自らの考えを構築しようとしています。グローバル化という大きな流れの中に生きる一人の人間として、また国際都市神戸に住む者として「文化とは何か」を考えさせられる機会は日常生活の中にも多々あります。これまで机上の空論のように扱われてきた文化をめぐる議論を、より現実に即した形で考え、様々な問題の解決策を探していく、そんな躍動感溢れる学問分野に魅了され、現在はこの分野に絞って勉強しています。

次年度には卒業研究がありますが、その際もこれに関連する内容で、自分らしい研究ができればと思っています。

奨学会からのコメント

「文化」という概念の定義には百人百様の答えがあるようです。それが文化の多様性の証明なのか。「国際」「文化」というのはいわば対立概念ではないのか。国際文化学部というものが創設されて日が浅いこともあるのだろうか、どうもイメージがはっきりしない。「文化」とは何か、そして「多文化共生の可能性」の卒業研究が待たれる。

大西 正也　大阪大学外国語学部・外国語学科・ベトナム語専攻4年（加納高校卒）

ハノイ大学という外国語大学に交換留学生として通っております。授業は平日毎日午後1時から4時までという体系で行われてきました。ベトナムに来た頃と比べると、もちろん現在の状態はかなり成長して良く話せるようになってきていると思います。しかし、私は留学を7カ月してきて、一つ感じていることがあります。それは、周囲がすべて外国語で構成されている生活環境にいて初めて外国語の能力は伸びる、ということです。現在の私の生活は、いわば「ベトナム語をどうしても使わなければならない状況」という形をとり、使わなければ生きていけないとまでは言えなくとも、自分のしたいことを満足に行うことはできません。人間という生き物は、こういった状況にいて初めてしっかりその言語に向き合い、勉強しよう、と思うと私は感じます。もちろん日本で2年間学んできた基礎もとても大切です。しかし、言語の鍛錬は、基礎学習と実習の二つがそろってようやく完成するものだと思います。今の自分に満足することなく、日々自分のベトナム語が成長するよう努力していきたいと思います。

奨学会からのコメント

ベトナム語習得の先が知りたい。ベトナム語を語学・音声学の体系として研究するのか、ベトナム文化・文学の方面を研究するために学ぶのか、仕事の道具として使うのか、ベトナムで生活したいだけなのか。交換留学生という選ばれた存在であるからこそ意識的に学んで欲しい。最終的にはそれら全てを包括するような結果になるにしてもである。

田島 才雅　慶應義塾大学理工学部応用化学科4年（岐山高校卒）

3年生は、「マテリアルデザイン」「環境・分析・プロセス工学」、「オーガニックサイエンス」、「バイオサイエンス」といった4つのフレームから構成された専門的な科目を学びます。私は将来、新しい素材の開発に携わりたいと考えているので、現在は「マテリアルデザイン」に関連する科目を多く履修しています。人類の文明は、新たなマテリアルの出現によって発展してきたと言っても過言ではありません。快適な生活を支えるエレクトロニクス、自動車などを代表とする工業製品はもとより、医療、エネルギー、環境技術など、それらのすべてにマテリアルは関わっています。そして、これからの人類の未来の行方にも、新たなマテリアルの開発は大きな影響力を持っていると思われます。ものづくりの基礎、新たな時代のマテリアルデザイナーとしての基礎能力を身に付けることができるよう、学業に励んでいます。

奨学会からのコメント

かつて「鉄は国家なり」という言葉があって、鉄鋼関連産業に従事する男性は国家を担う気概があったもの。時は移り、レアメタル戦争や都市鉱山などの文字に接するたび国の行く末を考えてしまうか、日本の技術陣によってレアメタル不用の技術が確立できそうとか。将来、日本産出のマテリアルを使用することで、世界を席捲できないものか。

今井 里江　法政大学社会学部社会学科4年（岐阜各務野高校卒 ）

今年最も力を入れていることがゼミです。不登校・虐待・無業という3つの問題が社会問題であり、これらは全て繋がりを持って起こっている、という仮説を立てて研究してきました。中でも私は「不登校」に着目して、フリースクールや定時制高校、不登校経験者の方にヒアリングを行ったのですが、そこで子どもの抱える多くの困難を目の当たりにしました。

何らかの理由で学校へ行かなくなった、行けなくなった子ども達は、学歴社会という壁にぶち当たり、その後の進路が険しくなる可能性が非常に高いです。学校に代わる支援機関へ通おうにも、経済的負担が大きく、更に社会的偏見もあります。

この研究を通して、支援には経済的支援と、安心できる居場所を継続的に提供すること、社会の偏見を少しでも減らすことが必要ではないかと考えています。そして私にできることとして、この研究を当事者の周りに伝えることで、間接的に当事者の支えになりたいと思い、今後高校へ行って研究の発表をしに行きます。

奨学会からのコメント

残念ながら学歴社会も社会的偏見もいつの世にもあった。食うや食わずの時代はそれで傷ついている暇がなかっただけ。戦後の高度成長期には社会そのものが膨張して閉塞感がなかっただけではないのか。「差別」は社会をつくるヒトという生物としての宿痾であるという前提から出発し、だからこそどうすればよいのかという様に思考をしたい。

加藤 伸祐　名古屋大学理学部地球惑星科学科3年（多治見北高校卒）

夏休みからいよいよフィールドセミナーが始まりました。これが私たちの学科の最大の魅力です。揖斐や鵜沼、瑞浪、坂下などに行きました。揖斐や鵜沼では、河原へ下りて、そこに落ちていたり、露出している岩石を観察しました。スケッチを残し、どの様な構造や組織が見えるか記述するのです。この一見地味に見える作業によって、その地域にどの様な岩石が分布し、どの様にして形成されたのかが分かります。瑞浪では超深地層研究所という所を見学しました。地下300mの環境がどんなものか説明を聞き、将来核廃棄物の地層処分に応用できるようにデータを取っていると分かりました。坂下ではGPSの精度についての実験と、阿寺断層の見学をしました。私はこのフィールドセミナーが大好きです。講義室の外へ出て、実際に私たちの住む地球と向き合うことのできる学科は、この学科だけだと思います。美しい景色やすばらしい自然を見る事ができ、毎回とても楽しみです。まだまだ初歩的な手法でしか観察していませんが、これから、3年生、4年生になった時に手際よくできる様に、今のうちに完璧にしておきたいです。今、私は「学ぶ」ことがとても楽しく、とても充実した日々を過ごしています。

奨学会からのコメント

フィールドワークが楽しいのはわかるし、学ぶ喜びも伝わってくる。が、地球と向き合う事のできる学科は地球惑星学科だけではなく、卑近なところで農学部の実習で地球の素晴らしさと向き合うこともある。即ち、学問とは森羅万象に対して想像力・感受性・創造力を磨くことだと思うからである。しかし、とりあえずエールを送っておきたい。